

## 2009年度外国人留学生入学試験「実技試験」「小論文」等の採点基準

学科・専攻	実技試験(芸術学科は小論文)	面接		
	狙い・意図、採点のポイント	狙い・意図、採点のポイント	小論文 利用	実技 試験 作品 利用
日本画	与えられたモチーフに対する理解および解釈(構成、描写、表現)する力を求めた。	出題に対して本人の解釈および制作の意図を中心に、日本語に対する語学力の有無を確かめた。	○	○
油画	ゲーム機を手にして、実際にゲームに興じる人物がいる。モチーフを受験のための絵のモデルさんではなく、家族や友人といった現実味のある人物、考えたり笑ったりする感情を持った人物ととらえられる設定であることが今回の出題のねらいである。考えながら指先を動かすモデルを見てどのように表現するか、創意工夫や応用力、感受性が感じられるか、を採点のポイントとした。	制作意欲があり、表現することに真摯に向き合っているか。なおかつ本学の油画専攻を選んだ理由が明確かどうか。総合的に見て採点している。	○	○
版画	与えられた布を手にもって、自由に表現させることで、イメージ力、構成力を含めたデッサンの能力を総合的にみる。	・デッサン実技については、持参したポートフォリオも参照した。 ・高校での美術経験等について。 ・版画専攻を希望した理由等。	○	○
彫刻	比較的良好に知られている石膏像を出題し、対象の観察力や、平面構成、立体の把握力などをほかり、豊かな空間認識や、個性的な感覚を有しているかを判断した。さらに、学部一般入試の入学学生との実技力の差異についても判断基準とした。	明確な本学への進学目的を持ち、独自の研究テーマ、具体的な志望領域があるかなどを質問し、将来作家としての展望など自分の意思を明確に述べることができるかを審査した。	○	○
工芸	基礎的描写力の有無をみる。 立体意識や物質感をどの程度理解できているか、また表現出来ているかを総合的に判断する。	本学の工芸学科を志望する動機、何を学びたいのか、将来への展望について説明力のある答を求めると同時に人物から受ける熱意を感じ取りたい。また授業に必要な日本語能力のレベルを判断した。	○	○
グラフィックデザイン	出題のねらいは、デザイナーとしてビジュアルコミュニケーションの効果を造りだすのに必要な造形力を求めている。 鉛筆デッサンでは、創作の原点ともなる観察力、そこから生まれる発見やひらめきなどを描く描写力を、色彩構成では課題を造形化する発想力と構成力を問う。	・日本語日常会話が行えるか。 ・専門分野の用語が理解できるか。 ・入学志望理由が明確であるか。 ・授業への取り組みの意欲があるか。	○	○
プロダクトデザイン	与えられたモチーフ(ガーデニング用スコープ)のハンドルを自由にデザインし、鉛筆デッサンする課題を出題した。出題のねらいは、モチーフの形や構造を正確に描けるか、色や質感が表現できるか、独創的で理にかなったデザインができるか、その表現力があるかを見ることである。それらの完成度が採点のポイントになった。	面接では、しっかりと自分の考えを伝えられるか、学習目標は明確かが採点のポイントになっている。	—	—
テキスタイルデザイン	テキスタイルデザインを学ぶために必要な基礎的観察力と色彩表現力を問うことをねらいとして出題した。設問を正しく理解しているかどうか、独創的且つ調和的な構成が丁寧に行われているかを採点ポイントとした。	ひとつは、授業についていくことが出来る十分な日本語力を有しているかどうかを問うために、もうひとつは、テキスタイルデザインを学ぶための意志や志願の動機を明確に説明できるかどうかを問うことをねらいとして面接試験を実施。また、共通教育の小論文は日本語の記述力を見るために参考にした。	○	—
環境デザイン	環境デザインを学ぶうえで最低限必要な基礎的デッサン力があるか。 形、空間を把握し、平面上に表現する能力があるか。	本学科の授業を理解できるだけの日本語能力があるか。日本で、また本学科で環境デザインを学ぶ意欲、目的意識がはっきりしているか。 デッサン以外のデザイン力をポートフォリオによって評価。	—	—
情報芸術コース	主題に対する独創的な着想能力と、それを表現する創造的な構想能力を審査した。	情報芸術の分野において、将来にわたり、表現活動を実践するための感性と創造的な諸能力を審査した。 ・美術、デザインに関する基礎的な知識はあるか ・留学経験が有効に身につけているか ・人物評価	○	○
情報デザインコース	問題文の「あなたが履いている靴のこと」とは、受験生自身の日常生活を構成する「経験」を指示している。自己の経験を捉える力と、その経験を他者にもわかるように表現する力は、情報デザインの基本的な能力である。それは、この領域のデザイン対象となる「情報」がもともと不可視な存在だからだ。また、扱う「情報」は常に人々の生活に直接に結びついている。それ故に、創作する情報の形は、常に人間の活動と経験が鑄型となる。この試験で問うのは、受験生がそのような観点に気づきつつあるのか、あるいは、作品制作をとおしてそのことに気づき力を持っているかどうかである。 この作品を制作したみなさんは、自分の経験に本当に着目できたのだろうか。描きながらその経験の豊かさに気がついたのだろうか。そして、その豊かさを視覚作品として構想し組み立て表現することはできたのだろうか。また、経験をふり返ることとそれを新たな作品として創作することを楽しむことはできたのだろうか。私たちは、提出作品に、みなさんが楽しんだ痕跡とそれを支えたエネルギーを発見し感じそれを評価し採点した。	留学の意図や目的が明確になっているか。 学科やコースの教育内容を理解しているか。 日本語によるコミュニケーション能力があるか。(小論文の記述も参照)	○	○
芸術	日本語の習熟度だけでなく思考力をみます。論述の着眼点が出題内容に対して明確であるか、論旨は明確で説得力があるか、という点も判断基準となります。常識的にまとめあげた文章より、テーマに踏み込んだ、独自の発想を期待しています。—	外国人留学生の存在は他の学生にとっても大きな刺激となります。面接試験では、直接本人と会って、日本語能力が十分であるか、芸術に関する最低限の基礎知識を持っているか、芸術学科で勉学を進めていくだけの知的能力を持っているか、などを判定します。	—	—

## 全学科共通小論文

小論文の出題については、全般的に文章の組み立て方、論述の展開、要旨の明確さ等を通じて、自己の思考性の確かさを試すことをねらいとしている。また、美術全般への理解、興味関心の度合いを知ることも併せて目的として出題している。  
留学生入試においては日本語能力を試すことも大きなねらいとし、文意の明確さと誤字脱字等について、特に採点の重要ポイントにしている。  
A(優)90～100点、B(良)70～89点、C(可)60～69点、D(不可)0～59点